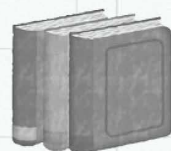




発掘 文学の宝



苓北町にゆかりのある文学を発掘し掲載しているこのコラムですが、第8回目となる今回は少し趣向を変えてこの苓北町（富岡）にてロケのあった映画『南の風（続・南の風含む）』についてです。2回にわたりご紹介します。

企画／ドットワークス 下川嘉奈

『続・南の風』

1942年10月22日公開

原作：獅子文六、監督：吉村公三郎

出演：佐分利信、高峰三枝子、水戸光子、笠智衆ほか



戦時中に作られたとは思えない喜劇映画

獅子文六の原作 「南の風」映画ロケ

平井 建治

平成16年6月26日、志岐集会所で、富岡の熊日天草西販

売センター創業50周年記念事業として、映画「続・南の風」映画会（主催：熊日パビリオ

ン、共催：苓北町教育委員会、後援：苓北町連合女性の会・

苓北町老人会連合会）が行われた。観客は200人を超えて、開館以来の入場者となった。

それは、昭和17年夏、富岡で行われた映画ロケの体験者が、まだ健在であったからに他ならない。富岡新町の平井栄夫さんは、少年の通行人でエキストラ出演。当時17歳だった富岡五丁目の森田恵美子さんは、水戸光子の熱烈なおっかけファンだった。また、富岡へ水泳合宿に来ていた熊本市の第一高等女学校が、映画のロケ隊と遭遇している。

映画会の数日前、合志町の松延さんという人から、販売センターに電話が入った。「あの時、ロケは見たけど、その後映画は見えないので見たい」という。映画会前日、熊本からバスで来た80歳近い松延さんと友人を、同センター社員が本渡まで迎えに行った。

松延さんが映画会を知ったのは、同センターが熊日新聞

に載せた映画会の案内広告を見てからのことだった。この他、山鹿市、熊本市から5人の来場者もあった。このように、入場者記録をつくった要因は、入場料無料は別として、

連合女性の会が「会員研修事業」として動員したこと。教育委員会の周知協力があったこと。それに、同センターが告知チラシを4回ばら撒いたことが考えられる。さらに、映画会に先立ち開催された、熊日の看板記者であり、多くのファンがいた井上智重さんの講演会も呼び水になったに違いない。

ところで、昭和16年、獅子文六の小説「南の風」が、朝日新聞に連載された。あらずじは次の通りである。

ある男爵家の次男・宗像六郎太は、南方熱に取り付かれ、18歳の時にシンガポールに出奔したことがある。30歳

になっても、自宅でぶらぶらと暮らしていた。ある日、薩

摩出身の母と鹿児島へ行った。そこで、かつてシンガポールで友達になった加世田重助と偶然にも再会する。重助はカンボジアで知った新興宗教・紅大教の開祖を日本に迎

える準備中だった。その開祖は、西郷隆盛のご落胤だという。実は、西郷は西南戦争の時、鹿児島島の城山で自刃せず、ひそかに日本を脱出してカンボジアへ逃れた。カンボジアでその地の娘に生ませたのが開祖という。それを聞いた六郎太は、その話にすっかりのっけしてしまい、父が残した全財産をつぎ込んでしまうが、それは真つ赤なペテンであった。

やがて、失意の二人は当てもなく熊本にやって来る。三角から汽船に乗り、海路2時間本渡へ。そして、江戸時代の城下町・富岡町へ向かう。鬼池経由のバスは、土煙を上げながらいよいよ富岡へ入ってくる。

（つづく）